

水性木版の創作によるトランスメディアーションの現実を伝う

論文要旨

S1319908 版画専攻 朱夫誠

現代では、写真撮影は他の複雑な操作を考慮することなくカメラのシャッターを押すだけの簡単な作業となり、そのような便利なデジタル写真は、現実を認識する主流の情報源となっている。

写真の発明以前は、版画が現実を判断するための情報源であり、現実のイメージを創り出すための権利は常に人間の芸術的創造性の中にあった。写真の発明以降、写真が創り出すイメージは機械を通じたイメージであり、現実のイメージは人間の創造性から疎外されることとなる。しかし、こうした写真の発明はイメージを現実に近いものと言えようか？

絵画作品はその画面に描かれたイリュージョンである以前に、絵の具と支持体からなる現実の物質である。そうした絵画作品を写真に写し出したとき、画面上で確認できる物質感やスケール感は喪失し、現実のフラット化が起きる。写真はむしろイメージの非現実化を押し進め、写真のデジタル化は更にそれを加速させている。

トランスメディアーションとは、イメージを複数のメディア間で転換することである。複数のメディアによって現実を写し出すトランスメディアーションは、私たちの現実理解の多様性をもたらす。水性木版の方法によってデジタル写真から版画を制作するトランスメディアーションがなされたとき、水性木版の物質性は、デジタル写真に反映されない現実の距離感やスケールをもたらす、イメージは現実の特性を取り戻す。

本論文では、日本の水性木版の手法を用いたデジタル写真からのトランスメディアーションによって新たなイメージを創り出すことで、現実のイメージを人間の持っていた芸術的創造性の側に取り戻すしていくプロセスについて論じる。

第1章では、筆者が現実と記憶の中のイメージの間にある差異に着目するようになったきっかけである2018年にオーストラリアのヴィクトリア美術館を訪れた際のダリの《永遠の記憶》との出会いについて論じ、窓や階段というモチーフの持つ特性について検討し

た上で、木版画というメディアの持つオリジナリティと、筆者の制作手法の独自性を明らかにする。

建築の窓や階段は、目の前にあるものの見え方を変えうる物質的な構造物である。なぜ不透明な窓を通して一種の現実を見ることが出来る可能性があるのか、現実的な視覚能力の限界を越えて感覚の領域に入り込み、トランスメディアーションにおける根源的なイメージの存在をどのように理解すればよいのかについて述べる。また、階段を上から見るときと下から見るときの相対的な差異によって、視覚が捉える現実が部分的でしかないと説明し、このような階段のイメージが、現実の視覚的判断にどのような影響を与えるかについて述べる。

そして、第3章の水性木版画の分析の前段階として、ベンヤミンの『翻訳者の使命』を理論的根拠に木版画作品におけるオリジナリティを分析した上で、筆者自身の版画作品のトランスメディアーション構造をマネの版画と比較することで、筆者自身の創作の方向性を理解・検証し、その制作手法の独自性を明らかにする。

第2章では、現実を認識するとはどういうことなのかを明らかにした上で、異なるメディアを通して捉えられる現実の特性と差異について論じる。筆者は、アルツハイマー病を患った自身の祖父とのコミュニケーションの経験から、現実の認識の方法は一つではないことに着目し始める。一瞬で撮影と現像が行われ、加工も容易となったデジタル写真以降、見るという行為はカメラを向けるという行為に置き換わり、人間が認識する現実の形は変容した。こうしたフレームを通じた現実の認識の方法を「選択的現実」として定義し、デジタルイメージの限界について論じていく。

第3章では、水性木版画を用いることでどのようにデジタルイメージの限界を乗り越えることができるかを論じる。まず中国から日本へ伝わった水性木版画を紹介し、現実の光景を元にしたトランス・メディアーションがどのように実現されてきたのか、両国のそれぞれの文化的発展によってどのように分化していくのかを検討する。続けて、マイク・リオンの作品と筆者の作品を対比しながら木版画の手仕事の重要性を明らかにする。さらに、いずれも機械印刷のような形態を指向する湯浅克俊とクリスティン・バウムゲルテルの手仕事による木版画と比較して、筆者の木版画作品において境界線が不明瞭であることを指摘した上で、特に、ヴォルフガング・ウルリッヒの著書『不鮮明の歴史』を参照し、超越した鑑賞にはぼかしたイメージが必要であることを実証する。

本論文の結論として、筆者がなぜ窓と階段を水性木版画作品の主な主題としているのかを、絵画史における世界の裏側を表現する視点としての窓の概念と、視点の単一性に揺さぶりをかける階段の幻視的想像力を通じて明らかにする。また、第3章で述べた筆者の作品とマイク・リオン、湯浅克俊、クリスティン・バウムゲルテルの作品と比較分析をもとに、水性木版画によって現実をイメージにトランスメディアーションした創造過程を通して、筆者が現実のイメージを人間の芸術的創造性の側に取り戻したことを示す。